

詩篇139篇 「私を知る神」

1A 神の全知 1-6

2A 神の遍在 7-12

3A 神の創造 13-18

4A 神の救い 19-24

本文

私たちの聖書通読の学びは、前回、詩篇 138 篇まで読みました。私たちは詩篇通読も終わりに差し掛かっていますが、138 篇からダビデの詩篇になっています。終わり、あるいはクライマックスに相応しい詩篇です。ダビデの祈りと賛美は実に深く、私たちは霊の深みへの導いてくれるからです。今朝は、139 篇を一節ずつ見ていきます。ここは、私たちが何かを神にしなければいけない、というものではありません。神が自分にしておられることに、自分が母親の乳房にすがる赤ん坊のように、主の御手の中に自分を任せていく箇所であります。

今、交読をしてここの賛歌で、鍵となる言葉を挙げるなら、「知る」ですね。神が全てを知っておられるということです。しかも、それは一般的な知識ではなく、「私を知っている」という個人的な、人格的な知識であります。私について、私以上にすべてを知っておられる方が、主なる神です。

1A 神の全知 1-6

この詩篇は、神のご性質について六節ずつに分けることができます。一つは、1-6 節までで「神の全知」のご性質を見ます。

139 指揮者のために。ダビデの賛歌 139:1 主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。139:2 あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。139:3 あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。

主は私を知っておられますが、ここでダビデが強調しているのは「探っている」ということです。ただ知識を持っておられるのではなく、調べつくすというような意味があります。鉱脈を捜すために地下を掘り続けるとか、法廷における訴訟で調べるであるとか、調べつくすという意味合いのある言葉です。ですから、主は私のことをとことんまで知っておられるということです。それで2節に出てくる言葉、「読み取る」というのも「識別する」という意味で、3節の「見守る」は「振り分ける」という意味があります。自分の取っている行動について、座ること、立つこと、これらの行動に働いている思いまでをはっきり区別して、そして、歩いたり伏したりする時もなぜそのようなことをしているのか、はっきりと責任の所在を明らかにしているということでもあります。

私たち人間は、自分の取っている行動について、その思いまで探られることは人間にはできませんから、曖昧にして誤魔化そうとします。本当は、これらのことを行なっているのは不純な動機からだったのですが、人にはいかにも純粹に行動に移したのだと言い訳することができます。しかし主の前ではそうではありません。「ヘブル 4:13 造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。」

139:4 ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそれをことごとく知っておられます。

私たちが、何か言葉を口に出す時に、その前に思いが先行しています。その思いがどのように自分の中で形成されているのか、その過程は不思議なものです。これまで無かった思考がある時に与えられ、それを言葉として言い表すまで、その不思議な成り立ちを主は、ことごとく既知しておられます。バビロンの王ネブカデネザルは、「この大バビロンは、私の権力によって、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が建てたものではないか。」と高ぶったのですが、「このことばがまだ王の口にあるうちに、天から声があった。「ネブカデネザル王。あなたに告げる。国はあなたから取り去られた。(ダニエル 4:30-31)」とあります。

139:5 あなたは前からうしろから私を取り囲み、御手を私の上に置かれました。

主が全てのことを知っていることを知ることは、一つに恐れを抱かせるものですが、もう一つは慰められるものであります。それは、他の人には知られていないこと、自分しないないという孤独を味わう時に主は知っておられることを知るの安心するからです。ここで言っている「私を取り囲む」という言葉は、まるで自分が重要人物であるかのように、警備する人が前後に、また左右に自分を守っている姿であります。主が、その全知の力によって私を守って下っているのです。

私たちは矛盾を孕んだ存在です。孤独を味わうので自分を知ってもらいたいと思って他の人に話すのですが、それでも自分の全てを知られたくないという恐れがあります。知られたら、その人たちから拒まれるという恐れがあるのです。ですから、自分のことを知ってほしいと願うのに、すべてを明かすことができないという狭間の中で悩んでいるのですが、全てを知りつくしている神の前に出ることが、その問題を解決します。主は、私たちの心の動機、その不純と悪を全て知っておられます。けれども、それをもって罪に定めるのではなく、主の前に出る者を、キリストが流された血によって私たちの心を清めてくださり、それで私たちを恵みによって守ってくださるのです。

139:6 そのような知識は私にとってあまりにも不思議、あまりにも高く、及びもつきません。

主が持つておられる、自分自身への思いと知識があまりにも大きいので圧倒されています。私たちは自分で自分を知っていると思っていますが、いやそんなことはない、自分より、圧倒的に遙か

に自分を知っておられる方がおられるのです。自分を知っていると思っても、実は自分の背中を知りませんが、私の妻は私以上に私の背中を知っているでしょう。そこにあるホクロを私以上に知っているはずで、神は比べ物にならないほど知っておられます、頭の毛さえも数えておられるとイエスは言われました(ルカ 12:7)。

2A 神の遍在 7-12

そして次に、ダビデは 7-12 節で「神の遍在」について話します。「遍在」とは「遍く存在する」ということです。どこにもおられる、ということです。全てを知りつくしている方は、私がどこにいても、どのような状態でも私を知っておられます。

139:7 私はあなたの御霊から離れて、どこへ行けましょう。私はあなたの御前を離れて、どこへのがれましょう。139:8 たとい、私が天に上っても、そこにあなたはおられ、私がよみに床を設けても、そこにあなたはおられます。139:9 私が暁の翼をかけて、海の果てに住んでも、139:10 そこでも、あなたの御手が私を導き、あなたの右の手が私を捕えます。

神の御霊が、自分が上に行っても、下に行っても、また地の果てから果てまで速やかに翼で移動しても、そこにでも主がおられるということです。今日、私たちの社会にはプライバシーというものがなくなりました。スノーデン氏によって、アメリカの NSA がメールやソーシャルメディアの情報を収集していることが暴露されました。また今は GPS によって自分がどこにいるのか、その正確な位置まで把握されています。グーグル・マップでは自宅の写真まで出てくるようになりました。それで、多くの方が、プライバシーが犯されていると恐れています。しかし、実は、本当に誰にも知られない私的空間はないのです。なぜなら主が、私がどこにしようが、そこにおられるのです。

ヨナのことを思い出しますね。主が、「ニネベに行き、これに向かって叫べ。」と命じられたのに、「主の御顔を避けて、みなといっしょにタルシシュに行こうとした。(ヨナ 1:3)」とあります。主はヨナに目を向けておられたのに、彼が主の御顔から目を背けました。そして、ニネベとは正反対のタルシシュに行こうとしました。けれども、その舟の中にも主がおられました。嵐になり、その嵐はヨナが天地の神を信じているからでした。

私たちは、場所によってその態度を変えてしまいがちですが、それは主がどこにでもおられるという意識が薄いからです。人の前では優しい人として知られている人も、家に帰ったら暴君になる人がいます。教会に通う人にも、いつでもそれが起こりえます。教会や他のクリスチャンの前では真つ当なことを話し、そのように振る舞うことがあっても、その場から離れるとこの世の人と変わらない動きをします。しかし、どこにでも主はおられるのです。満員電車の中でもおられるし、部屋で独りになっている時にもおられるし、職場のど真ん中にもおられるし、その時に主がおられないかのように動いても、その全てを主は知っておられます。逃げられないのです。このことは、私たちの心を清めていただく知識となります。悔い改めて、目を覚まして祈り続ける動機づけとなります。

139:11 たとい私が「おお、やみよ。私をおおえ。私の回りの光よ。夜となれ。」と言っても、139:12 あなたにとっては、やみも暗くなく夜は昼のように明るいのです。暗やみも光も同じことです。

今の技術では、物理的に夜を昼のようにすることができますね。アメリカの特殊部隊がテロリストの巣窟に侵入する時に、赤外線を使った眼鏡を着用して、相手の動きを暗闇の中でも見ることができるようにしています。

しかしここでは、物理的なことを話しているのではなく、霊的なことを話しています。これは、絶望の暗闇です。かつてヨブが、息子と娘を失い、全財産を失い、自分の健康も失った後で、自分の生まれた日を呪いました。「3:3-5 私の生まれた日は滅びうせよ。「男の子が胎に宿った。」と言ったその夜も。その日はやみになれ。神もその日を顧みるな。光もその上を照らすな。やみと暗黒がこれを取り戻し、雲がこの上にとどまれ。昼を暗くするものもそれをおびやかせ。」しかし、その暗黒の時に主はおられました。ヨブは最後に、灰をかぶってご臨在される主の前で悔い改めました。ダビデも言いました。「詩篇 23:4 たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざいを恐れませんが。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。」

3A 神の創造 13-18

ですから、神は全知であり、そして遍在される方です。そして 13 節から 18 節まで「神の創造」を見ることができます。

139:13 それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです。139:14 私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさせて恐ろしいほどです。私のたましいは、それをよく知っています。139:15 私がひそかに造られ、地の深い所で仕組まれたとき、私の骨組みはあなたに隠れてはいませんでした。

詩篇には、数多く神が世界を造られたことは歌っていますが、ここは自分自身が神に造られたという、個人の創造に焦点を当てています。ダビデはまるで、現代の科学者のような物言いをしています。「私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられた」と言っています。彼は見たことがないのに、その不思議と奇しさに圧倒しています。その想像力と聖霊によって示されて、圧倒しているのでしょう。私は、改めて以前ブログで紹介した、受精から出産までを可視化するビデオを見ました。卵子に精子が届き、受精して、細胞が二つの分化するところから、次第に内臓が造られて、そしてお母さんの胎動を通るところまでの映像です。まさに、ここに書いてある「組み立てられた」また「仕組まれた」という言葉そのものです。それを作成した本人も、「今の科学では、説明できない不思議なことだ。」と言っていました。

そして興味深いのは、「地の深い所で仕組まれた」という表現です。もちろん、母の胎の中で仕組まれているのですが、そこに陰府の世界のような深みがあるということです。そこに、ダビデの

人間の姿の現実を直視する力を見ます。子供が罪なき姿で生まれたのではなく、罪ある人が死んで降りていく所と同じ、その罪の性質があるのだということを示唆しています。それでダビデはこう言っています。「51:5-6 ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。ああ、あなたは心のうちの真実を喜ばれます。それゆえ、私の心の奥に知恵を教えてください。」罪ある者として母の胎の中で形成された、という理解が初めて、私たちが自分を欺かずに真実に自分の心の内を見ることができるようになっているのです。

139:16 あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに。

神が私を母の胎で造られた時に、その時点で予めその後の日々、死ぬまでの日々をご自分で書き記しておられます。それはあたかも、小さな受精卵の中に DNA が既に存在していて、その DNA にしたがって、これからの行動の多くを推し量ることができるようになっています。神は私を胎児として造られている時に、私がいつ死ぬのか、またその時までどのようにご自分の救いを達成されるのか、こういったことを予め組み込んでいたのです。「エペソ 2:10 私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」

ですから、私たちは午後に何人かの方に救いの証しをお願いしていますが、その道程は神の作品そのものであります。その人が切り開いた道ではなく、主が予めその人の誕生における環境から、その後の歩みまで神がその恵みによって用意しておられたことなのです。だから、その話を聞くことは美しいことであり、神に栄光を帰することになります。

139:17 神よ。あなたの御思いを知るのはなんとむずかしいことでしょう。その総計は、なんと多いことでしょう。139:18 それを数えようとしても、それは砂よりも数多いのです。私が目ざめるとき、私はなおも、あなたとともにいます。

私たちが、孤独になっている時にこの真理をしっかり携えていてください。どんな人間にも、このような思いをあなたに抱くことのできる人は誰もいません。海辺の砂よりも数多い思いを、私一人に対して抱いておられるのです。

そして、「私が目ざめるとき、私はなおも、あなたとともにいます。」という言葉は、二つの意味を含んでいるかもしれません。一つは、神の憐れみです。目を覚まして、なお自分が生きていることを知ります。滅んでも当然の自分が、それでも今、生かされているのだ、それは主がここにおられるから、憐れみを示しておられるからだということです。そしてもう一つは、この目覚めというのは復活だということです。神を信じる者が死ぬことを眠りにつく、と聖書は表現し、そして死者の中から甦ることを「目を覚ます」と表現します。したがって、ここでは主が必ず、死後まで、その復活をも

ってあなたを守られます、という救いの保障なのです。

4A 神の救い 19-24

しかし、私たちは前回、ダビデが、主がご自分の約束を成し遂げられる時に敵がいて、それを阻もうとするということ、138 篇から学びました。次、19 節から 24 節までは「神の救い」について学びます。これまで見てきた、神が自分を知っておられ、それで目覚めるところまで共におられること、この約束に挑む敵がいて、そこから救われることについて話します。

139:19 神よ。どうか悪者を殺してください。血を流す者どもよ。私から離れて行け。139:20 彼らはあなたに悪口を言い、あなたの敵は、みだりに御名を口にします。139:21 主よ。私は、あなたを憎む者たちを憎まないでしょうか。私は、あなたに立ち向かう者を忌みきらわないでしょうか。139:22 私は憎しみの限りを尽くして彼らを憎みます。彼らは私の敵となりました。

圧倒的される神の知識が与えられたのに、そうさせない力に対して、決然とした態度で臨んでいるのが「憎む」という言葉に表れています。神に感動する心を蝕む、神についての事柄を二の次、三の次にしようとするものです。神との関わりを希薄にして、「私は、エコ運転でクリスチャン生活をすればよいのだ。」としてしまう力です。「みだりに御名を口にします」とダビデは言っていますが、イエス様の名を口にしながら、神との命ある関係を実質、無にしようとする力です。口では主をほめたたえているのですが、心が離れていくようなものです。

イエス様は、そのような無意味さや無感動を「生ぬるさ」として、ラオデキヤにある教会に話されました。「黙示 3:15-17 わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、衰れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。」私たちは、信仰について「何となく」という姿勢は取ることはできません。主を愛するということは、敵を憎むという、決然とした態度の中で成り立っています。

139:23 神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。139:24 私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。

この祈りは、自分が憎んでいるという敵が自分の心の中にも入ったら、その敵と同じようになってしまいます。それで、自分の心を神が清めてくださるように祈っているのです。ダビデは 1 節で、「主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。」と言ったのに、今ここで、「私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。」と願っています。主が心を探って、調べられるなら、この祈りは不要のように思われます。いいえ、ここは、「私が自分で自分の心は知っている。自分の思い煩いも知っている、と思ひ込むことがないように。」という祈りであります。

主は知って、調べておられるのですが、その知識によって私自身が知り、自分の思いの中にある真実を知ることができますように、と祈っているのです。

自分のことを知ることは、痛い経験です。それを知るのは、とても難しいことです。エレミヤ書 17 章 9 節にある言葉は大切です。「人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。」ですから、私たちは自分で自分を欺いています。私たちは他の人に嘘を付くことができると思っていますが、実は自分自身に対しても嘘を付いて、自分が騙されていることが多々あるのです。

そこで主は、私たちが試練を受けるようにされます。「申命 8:2 あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたはその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。」イスラエルの民は荒野の旅をしなければ、自分がいかに主に拠り頼んでいなかったのかを明らかにされることはありませんでした。彼らが後に、モーセの書いた律法を読んで、いかに先祖がうなじがこわく、主に聞き従っていなかったのかを痛いほど分かりました。しかし、このような試みを通らなければ、その実態を知りえようがありませんでした。

ですから、自分がいかに頼りにならないかを、主に自分を調べていただくことで悟ることができます。自分さえも知ることのできない自分なのですから、すべてを知っておられる方に、そして「とこしえの道」すなわち死者の復活の時まで、守り導いてくださる方に拠り頼むのです。ここで、「傷のついた道」とありますが、これは悪を行なって負った傷のことです。ですから、自分が悪を行なってそれが傷となって、霊的な前進を妨げているものはないかどうか、どうか示してくださいと祈っているのです。どうかこの祈りを私たちの祈りとしていきましょう。